不定期刊行　　第486号　2013.06.01

中信高校山岳部かわらばん　　編集責任者　大西　浩

池田工業高等学校

ジュニアの育成と学校を地域に開くこと

私の勤務する池田工業高校のある池田町に地域総合型スポーツクラブ立ち上げの動きがあり、その準備として昨年度試験的に11月の１カ月限定でボルダリング教室を開いたことは以前紹介(472号、2012.11.20)した。教室は盛況で、参加者の反応もよかった。その後、町の関係者も参加した体験者も、そしてまた我々指導したスタッフも「せっかく始めたこの教室が単年度、１か月だけで終わってしまうのは惜しい、なんとか次のステップへとつなげられないだろうか」と冬場に議論を重ねてきた。会議では、「ボルダリングというスポーツの普及を通して行く行くは自然を楽しめる人づくりのお手伝いができればいい、特に次代を背負う子どもたちとこの素晴らしい世界を共有したい」という考えを大前提として進め、考えを理解してくれる人を集めた。こうして、長山協の関係者９名、地元のボルダリング愛好者５名がスタッフとして協力してくれることになった。結果、今年度はこの５月から毎月第１、３水曜日の夕刻と第３日曜日の月３回、池工のボルダ―壁を主たる練習場にして通年でボルダリング教室を開く運びとなった。

私が関わっていることで、学校の理解を得ることも問題なかった。ただ、私自身は県立高校の教員をしているので、いずれこの学校から離れることは否めない。そんなことも頭に入れた時、僕が立ち上げに協力したボルダリング教室が、僕がいなくなることで消滅してしまうようでは地域に根差したとはいいがたい。そこで、具体的な進め方として、学校関係者がいなくても地域のスポーツクラブとして学校という場を使って活動していくことができるように、スタッフを束ねる組織として池田町クライミングクラブを発足した。つまり、学校の場を借りる主体をこの池田町クライミングクラブとし、そこが中心になって町のクライミング愛好者を育てていく場として学校を提供してもらうという形をとることにしたわけだ。クラブの代表は、池田町在住で大町山の会会長の榛葉伸男さんにお願いし、快諾を得た。

池田工業高校は町に唯一の高校であり、地域と様々な形で連携していくことで、町にも学校にも多くのメリットがある。高校就学生徒数減から、県の施策で統廃合が進められている中で、僕は地域に学校があることの意味は決して小さくないと思っている。もちろん高校があることで、迷惑をかける部分もある。しかし、そのことも含めて高校があることはその町の文化のバロメーターであると思う。地域と学校の連携、これは僕自身の思いであるわけだが、いくらお題目で学校を開くとか地域に根差したと言ったところで、一般の地域のみなさんにとって休日に門扉の閉じられた学校、平日授業が行われている学校に足を踏み入れることはそう簡単なことではない。世の中には学校にいいイメージを持っていない人も多く、高校卒業以来足を踏み入れたこともないという人もいる。だが、小さい町の中に高校生がいるということは、間違いなく町を活気づける一助となる。地域は高校を育て、高校は地域に貢献するというのがあるべき姿なのだろうと思う。まあ、最初からそんなに大上段に振りかぶるつもりもないが、実際に教室を開くにあたり、準備のためにスタッフの皆さんに協力してもらい、壁を全面的にホールド替

えする過程で、山岳部員にも登ってもらったり、お互いに教え合ったりという交流も生まれた。

こうして迎えた教室。これが予想を大きく上回る好評で、町の募集に対しての応募者は４５名。主催者としては嬉しい悲鳴をあげ、とまどいながら教室の第１回を迎えた。さしあたっての現実問題として安全確保の問題等いくつかの懸案事項もある。物珍しさも手伝ってか、今は、大勢がワイワイガヤガヤ、楽しんでくれている。一方でクライミングは取り付きはいいものの、それを定着させるのは意外と難しい。せっかく立ち上げた地域スポーツクラブである。小さい町ではあるが、町の中に思った以上にクライミング愛好者がいて、そのネットワークができたことも有意義だ。あまり気張らず、一緒に楽しみながら、少しでも裾野を広げられれば嬉しいと思っている。

長野県高校総体登山競技大会終了

５月の高校山岳部は毎年極めて慌ただしい。入部したばかりの１年生の面倒を見ながら、センターの高校登山研修会に始まり、県大会下見、そして本番の県大会と続く。県の専門委員にはその合間に役員下見も加わる。・・・しかし、その忙しさも５月の終了とともに一段落、昨日、高体連の県大会が終わった。

例年になく早い梅雨入りで、開会式は霧雨状態の中での開始だった。しかし、設営審査をするころには雨もあがり、初日の審査は順調に消化できた。夕刻からは再び雨が降り始め、夜半過ぎにはかなり激しい降りとなったが、朝起きるとその雨もあがり、北の高気圧の張り出しからかそれほど暑くない絶好の登山日和となった。

優勝は男子が松本県ヶ丘、女子が屋代。男子の県ヶ丘は松田さんが異動して以来これで７連覇である。我が池工の諸君も健闘してくれた。上位チームは昨年と全く変わらない中、２位の屋代、３位の大町に続き池工は昨年と同じ４位。しかし３位の大町高校とはわずか0.25点差という僅差だった。残念ではあるが、精いっぱい頑張った生徒たちには、拍手を送りたい。ちなみに女子の２位は県ヶ丘、３位は長野西だった。

金峰山での県大会は、1998年、2004年に続いて今回が3回目。今回の大会は、これまでとは趣を変え、金峰山、小川山の縦走をするというタフなコースだった。男女あわせて５チームが棄権したという結果からもその厳しさが知れるが、天候にも恵まれ、大会そのものは順調で大きなトラブルもなく終わった。運営の立場からはコースへの役員配置やルート指定などで不十分な点があり、いくつか反省すべき点があったが、生徒また役員、顧問のみなさんのご協力でそのミスを補っていただき、無事終了することができた。全国、北信越に出場することになった各校の健闘を期待したい。

編集子のひとりごと

これまで金峰山には何度も登ったが、そのすぐ隣の小川山にはクライミングに行くということはあっても、その「小川山」そのものの山頂に登るということは、あまり考えたこともなかった。昨年秋の高体連専門委員の県大会下見の際に「一度くらいは『小川山』にも登ってみたい。」と話を出したところから今回の県大会のコースが決定した。結果、この時も含め、私自身この半年で４回この地味な山の頂上に立った。一昨日人擦れしていないこの山を下るときに、やや気の早いシャクナゲが花開き、私を労ってくれるかのように迎えてくれたのを見て、このちょっと不遇な山が好きになった。（大西記）